

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2015年度第1回公開セミナー報告

タイトル：アフリカの普段着のしたたかでディープな日常世界に出会う方法～「庶民のわざ」の感性・創造性の特質と「自己の他者性」について～

日時：2015年6月18日（木）17時40分～19時40分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階マルチメディア会議室（304）

司会：深澤秀夫（AA研）

講師：岡崎彰（AA研）

コメンテーター：鈴木裕之（国士舘大学）、モハメド・オマル・アブディン（AA研）

参加者：30名

内容：

今回のセミナーでは、長年にわたってアフリカでフィールドワークをされてきた元一橋大学教授の岡崎彰氏を講師に招き、アフリカの日常生活のなかに見られる「庶民のわざ」についてポピュラーアートをおもな題材として講演をしてもらった。講演のはじめに岡崎氏は、理解することと経験すること、分かったつもりになることと分かるまでもなくやれてしまうことのあいだに何かがあるのかという問いを投げかけた。そのうえで、音楽やダンス、芝居、映画、小説、話術などのアフリカのポピュラーアートに果たす「庶民の語りのわざと笑い」の重要性を指摘し、音楽・ダンスの動画を題材により具体的な「庶民のわざ」の解説をおこなった。そして、音楽、ダンス、ことばが別々の学問領域で議論されがちな現状にたいして、アフリカにおいてそれらは本来的に切り離せないものではないのかとの疑問を提起した。また、アフリカにおける「庶民のわざ」として、周囲と同じことをするのではなく、敢えて周囲とはちがうことをすることでうまくやっついこうとする「ずらし」があるとして、日本とのちがいを整理したうえで「別のあり方」に注意を向ける人類学の特質をあらためて指摘した。

コメンテーターである鈴木裕之氏とモハメド・オマル・アブディン氏からは、「庶民のわざ」を理解するうえでの現場性や身体性の重要性や、ポピュラーアートが市場経済と結びついて編集・商品化されることによる影響、幼年期からの習得過程における日本とアフリカのちがいがどのような点にあるのかなどについて、それぞれのアフリカおよび日本における経験を踏まえたコメントが出された。その後の総合討論では、日本人・アフリカ人のあいだにも差異があることが確認されたうえで、講演のなかで十分に説明されなかった点の確認もふくめて、アフリカの「庶民のわざ」の特徴があらためて話し合われた。

※当報告の内容は著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.